様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 29 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７２０１３３
研究課題名（和文）　持続発展教育のための現代アメリカ文学における持続可能性の表象研究
研究課題名（英文）　Study on the representation of sustainability in modern American literature for use in education for sustainable development

研究代表者
松岡　信哉（MATSUOKA SHINYA）
龍谷大学・政策学部・准教授
研究者番号：50351333

研究成果の概要（和文）：本研究では持続可能な社会構築という現代的課題に応えるため、現代アメリカ文学における持続可能性表象を検証し、さらにその知見を持続発展教育（ESD）教材作成に応用した。研究代表者は研究期間を通してフォークナー、ウォレン、スナイダー、パール・バックなどのテキストにおける持続可能な発展の表象を解析した。文学作品が持続可能性を描く仕方には悲観的なものも多く、ことに戦争を描いた作品では人間の自由の持続不可能性が描かれている。しかし文学的営為とは人間の生の困難さを真摯に見つめつつ、そこに一縷の希望を見出そうとするものである。そしてこのことはまた、現代社会における困難かつ必要な営みであるESDとも響きあうものがあると思われる。

研究成果の概要（英文）
To respond to the imminent need to create sustainable societies and communities, I examined how modern American literature has represented sustainable societies and sustainable relationships between human beings and nature. On the basis of the findings of this examination, I developed materials for use in education for sustainable development (ESD) and actually used them in classrooms. During the period from 2011 to 2012, with financial support from JSPS, I examined works by William Faulkner, Robert P. Warren, Gary Snyder, and Pearl Buck and created a database of the representation of sustainability in these works. In general, literary works describe un-sustainability instead of naively believing in the possibility of sustainable relationships between human beings and nature. Specifically, works in which the disasters of war are narrated often tell us that although human beings pursue freedom and are able to achieve it temporarily, the freedom is inevitably evasive and never permanent. However, by carefully examining these extreme difficulties and looking for something positive, literature can hopefully provide us with something to pray for in this difficult world. This perspective on the world in many ways resonates with the ideal of ESD, that is, the aim to see the problems of our society and our time and struggle to find possible resolutions by collaborating with others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	700,000 円	210,000 円	910,000 円

研究分野：英米文学　英語教育
科研費の分科・細目：人文社会系　人文学　文学　英米・英語圏文学
キーワード：英米文学、持続可能性

１．研究開始当初の背景

国連は 2005-2014 年を ESD の 10 年と定め、将来の世界を担う世代が喫緊の環境問題を理解し、持続可能な発展に向けた問題解決型の意識を養うための教育を構築しようとしている。国連が ESD 推進の方策について示した International Implementation Scheme の付属文書は ESD の特徴を定義し、学際的でホーリスティックなアプローチや、体験を重視した学習の必要を挙げている。そこでは国際理解教育、ジェンダー、平和・人権教育なども、ESD を構成する必須の要素として位置づけられている。小説や詩など文学作品は、さまざまな学問領域からの知見を自在に取り入れることができる点で学際的であり、読者が描き出された世界を疑似体験することができるため体験学習の補助教材ともなりうる。また外国文学を扱うことにより、学習者の国際理解を促進することができる。この意味で文学作品は ESD の格好の素材となりうる。

「持続可能な発展(開発)」の概念は 1987 年の国連ブルントランド委員会報告において定義され、広く知られるようになった。同じ時期に文学批評では文学作品における自然と人間との関係に着目する環境批評が隆盛となる。ところが、「発展(開発)(development)」に関して初期の環境批評は否定的な立場を示している。これはこの初期環境批評が、自然保護を重視するディープエコロジーと深く結びついていたためである。また現在でも、例えばローレンス・ビュエルは『環境批評の未来』(2006)において、「持続可能な発展」の概念は企業による開発に方便を与えるもので、本当の意味での「持続可能性」を損なうものだと述べている。このように、文学は持続可能性を開発と結び付けることに対する嫌悪を示すことがある。本研究では ESD 推進の立場から、文学作品において、自然と人間の持続可能な関係がいかに表象されているかを研究するものである。また文学における持続可能性の表象が、「持続可能な発展」という概念に対してどのような関係を持つかを検討することを企図した。ESD のための文学素材の利用という観点から見れば、肯定的であれ否定的であれ、「持続可能な発展」についての問題意識が文学教材の中に見て取れればよいと思う。

研究開始当初までに松岡は、現代アメリカ文学作品における持続可能性の表象を研究してきた。前掲書でビュエルは、環境批評の歴史的な流れを二派に分類している。第一波の環境批評は自然の価値の重要性を訴え、人間中心主義の文明の破壊的影響から、自然を救済することを目指すものである。第二波の環境批評は社会的エコクリティシズムとも呼ばれ、環境の概念を人間が作り出した都市空間にも拡張した。第二波の環境批評では、自然と文化の相互関係が作り出すシステムを、人間が科学などの知を利用して維持する立場が賞揚されている。この第二波の立場は、持続可能な発展を推進するための ESD の理念とつながってくる可能性がある。松岡はこのビュエルの分類を基に、文学における持続可能性の表象を二つにモデル化し、ゲーリー・スナイダーやウィリアム・フォークナーのテキストを分析してきた。また「LSD:持続可能な発展のための英文学研究」と題した日本英文学会北海道支部シンポジウム(2010)では、ESD への文学研究の応用の観点から話題提供を行った。

２．研究の目的

ESD(持続発展教育)は学習者が喫緊の環境問題を理解し、問題解決への態度を養うことを目標としている。ESD は、環境資源配分が現在世代と将来世代、先進国と途上国の間で不公平にならぬよう、「持続可能な発展」の必要を強調する。文学批評では 1980 年代頃から環境批評が現れ、自然と人間の関係を探ってきた。マイノリティや女性など抑圧されてきた人々の立場からキャノンを見直してきた文学批評は、自然という弱者の立場から語るようになる。しかし環境批評では「発展」という概念に対する懐疑も見られる。本研究では、持続可能性の観点から文学における自然について分析し、文学言説が「持続可能な発展」をどうとらえているかを明らかにする。

３．研究の方法

本事業では、2015 年から 2014 年の期間に国連が推進している ESD（持続発展教育）の観点から、主に現代の英米文学作品における自然と人間の持続可能な関係の表象を検証した。またさらにそのテキスト研究の結果を踏まえ、ESD のための教材を作成した。

ESD への活用の観点から、文学作品における「持続可能性」、「持続可能な発展」の表象を検討するため、個別のテーマごとに研究を進めた。(1) マイノリティの登場人物や文化、(2) シャーマニズムや仏教、の二つがその

個別テーマとなった。これらのテーマに即して、個々のテキストが持続可能性をどのように表象しているかを見た。また個々のテーマごとに、白人作家と非白人作家が描く、自然と人間との持続可能な関係の差異についても検証しようとした。

以下に個別年度ごとの研究方法について述べる。平成 23 年度前期は、研究計画に基づき、ネイティブ・アメリカン作家が表象した持続可能な自然と人間の関係を探るべく、文献収集と精査を進めた。この作業を通して以降により深く研究を進める作家群を絞り込み、調査を進めた。マーモン・レスリー・シルコーの *Ceremony* についてはデータ整理を行い、ESD のための教材化案を現在作成中である。

平成 23 年度後期には、持続可能性の問題をマイノリティの視点から考察すべく、ユダヤ人や黒人の登場人物を扱ったアメリカ文学作品を研究した。具体的にはロバート・ペン・ウォレンの *Wilderness*, および *All the King's Men*、そしてウィリアム・フォークナーの *Absalom, Absalom!* を取り上げ、ユダヤ人や黒人が南北戦争という背景の中でどのように描かれ、また持続可能な自然と人間の関係についてどのような示唆を与えうるのかを考察した。この作業の成果はアメリカ文学会北海道支部の研究談話会で公開し、フィードバックを得た。

平成 24 年には、前年の成果に基づいて、以下の研究を進めた。

(1) ユダヤ人や黒人などマイノリティの視点から見た持続可能性表象についての口頭発表と論文作成。
(2) 自然災害を取り扱ったパール・バックのテキストの ESD 教材化と論文におけるその紹介。

(1) についてはウォレンに関する論文とフォークナーに関する論文をそれぞれ一点作成した。またこれを踏まえてウォレンとフォークナーの持続可能性表象を論じた発表をアメリカ文学会で行った。またここで得たフィードバックを発展させ、サウスミズーリ州立大学での発表を行うとともに、論文投稿を行い、現在査読中である。

また (2) については作成した教材を演習や講義科目において使用し、ESD 教材としての有用性を検証した。この実践に基づき、ESD 教材としての活用のための指導案を考案した。またこの教材と指導案は勤務校の紀要論文として発表した。

４．研究成果

本事業の成果としては二冊の共著(海外１、国内１)、論文２、学会発表２として発表するとともに、ESD 教材の形で応用し、勤務校の授業で使用している。また、文学を通した ESD のためのカリキュラム作りにも目下取り組んでいるところである。

本研究のテーマとして、文学作品が持続可能な発展の概念をとらえる仕方は肯定的か、否定的か、という点を見極める、ということがあった。研究代表者は研究期間を通してフォークナー、ウォレン、スナイダー、パール・バックなどのテキストにおける持続可能な発展の表象を解析したが、これらのテキストが人間の文明の持続可能性をとらえる仕方はおおむね悲観的であり、特に戦争を描くなかで人間の自由の持続不可能性を描いているさまが抽出できた。しかしながら特にフォークナーやウォレンなどの作家は人間の自由獲得のための格闘が持続不可能であることを示しつつ、自由を希求する魂の存続に希望を託す物語を綴っているように思われる。人間の生の困難さを真摯に見つめるとともに、そこに一縷の希望を見出そうとする文学的な営みは、これまた現代社会における困難かつ必要な営みである ESD と響きあうものがあると考える。

本事業の出発点では、研究代表者は主に自然と人間の持続可能な関係の観点から研究を進めることを目指した。しかしながら 2011 年 3 月の大震災と原発事故以降、自然の制御と汚染の言説の検証へとその射程を拡大し、今後も研究を進めてゆくことを考えている。すでにパール・バックの津波など自然災害表象を取り扱ったテキスト分析と教材化に並行して、同作家が原子爆弾製造当時の科学者たちの苦悩をエンターテイメント的に描いた『神の火を制御せよ』を ESD の観点から教材試案として開発している。この成果は 5. に示した論文ですでに公表されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 松岡信哉、「持続発展教育と現代アメリカ文学」、『政策学論集』、査読なし、第 2 巻第 2 号、2013、1-12

(2) 松岡信哉、「貧乏白人と奴隷制：ウォレンとフォークナーの南北戦争物語に見る自由の持続可能性」、『政策学論集』、査読なし、第 2 巻第 1 号、2012 年、13-20

〔学会発表〕（計 2 件）

(1) MATSUOKA Shinya. "Unsustainable Freedom: The Civil War Narratives of Warren and Faulkner." Faulkner and Warren Conference, Center for Faulkner Studies, 2012 年 10 月 25 日～2012 年 10

月 27 日， Southeast Missouri State University

（2）松岡信哉、「自由と奴隷制の相互関係―Robert Penn Warren と Faulkner における南北戦争」、日本アメリカ文学会第 51 回全国大会、2012 年 10 月 13 日～2012 年 10 月 14 日、名古屋大学

〔図書〕（計 2 件）

（1）須賀昭代、松岡信哉他、「ウォレンの『ウィルダネス』における自由と自然」、『英米文学と戦争』、英宝社、査読有、2013、195-206

（2）Hamblin Robert and Chris Reiger. Eds. MATSUOKA Shinya and others. "Hunting for Cultural Hybridity in Faulkner and Morrison." *Faulkner and Morrison*. Southeast Missouri State University Press. United States. 査読有，2013. 掲載確定，校正中.

６．研究組織

(1)研究代表者

松岡　信哉　（MATSUOKA Shinya）

研究者番号：50351333